

塵

点

録

十八

049

ア3

18



塵魚録

十八



備 所 付	品 目	年 月 日	縣 費 第 號
		昭 和 28 年 5 月 1 日	5

A04
73
18

A. 049
73
18

相傳子代之位

周記
眼養上人

宣永元年八月五日入院
二年二月五日入院

墨養上人

宣永元年四月十日入院
宣文元年八月十日入院
宣文元年十二月十日入院

念養上人

宣文六年八月十日入院
同十二年七月十日入院
天和元年九月十日入院

清養上人

薩戸牧師
宣文十二年三月十日入院

宗養上人

任職七年
十一月十日死
天和元年十二月十日入院
宣文二年二月十日入院

禪養上人

天和元年四月十日入院
任職七年
宣文元年二月十日入院

心養上人

宣文元年四月十日入院
同年九月十日死

體養上人

宣文元年九月十日入院
任職七年
天和元年四月十日死

辨養上人

之稱也○亦二月在○大少專念寺分入院
月十二卯十月三日建中寺一入院

善養上人

之稱也○卯十月乃性高院分入
日十日乙十月三日建中寺一入院

各養上人

之稱也○乙十月三日性高院分入

興善山大森寺代々

周山

行蓮社信譽上人 大竜和尚

延宝元丑二月四日死

中興

信蓮社深譽上人 吾益和尚

元禄七戌三月四日死

湛蓮社然譽寂隱上人 義典

大雄山性高院

始武州忍正覺寺
塔頭初三院今初二院

稱名院 西堂
一行院 平信

同山回蓮社滿譽玄道上人

光譽上人

回譽上人

曉譽上人

消譽上人

本堂成松

專譽上人

清譽還童上人

後相后寺

繡ノ湊槃像成

覺譽上人

白誓安阿上人

後建中寺

金襴九條ノ袈裟ヲ

光友公行寄附

心誓上人

移相應寺

躰誓上人

證誓上人

移建中寺

光友公行自筆六字ノ名号ヲ行寄附

檀誓上人

移相應寺

香誓上人

移建中寺

大公所承ニテ鐘ヲ鑄改メ玉ヲ

各誓上人

移相應寺

信誓上人

移相應寺

重修誓誓 性空院殿百年忌
松壽院殿行奪門佛殿立

實譽上人

持名山高岳院菩提心寺

慶長十三戊申為仙君之菩提所余平岩
主計頭甲列ノ教安寺ヨリ清須ニ移テ翌年
七月七日中邊郡小邊村ニ向テ石宇附
至十七年ニ今ノ名古居ニ移ス

周山照蓮社二叔譽上人

萬曆十之申甲列教安寺ヨリ清須ニ移リ同十二年
名古居ニ移ス之和八戌二月廿三日死八十歳

傳蓮社底譽上人

之和八戌年坊上寺所化ヨリ来ル
寛永五辰六月十七日死

本蓮社眼譽上人

寛永五辰相列錦倉光明寺取化番頭ヨリ来ル
寛永二十未相后寺ニ移

心蓮社念譽上人

寛永二十未江戸蓮光寺ヨリ来ル
寛文六年相后寺ニ移

信蓮社單譽上人

寛文六年養林寺ヨリ来ル
天和三亥梅香院ニ隱居

光蓮社心譽上人

天和三亥和判當麻護念院ヨリ来
貞享三才性高院へ移

誠蓮社躰譽上人

貞享三才 岩倉誓願寺ヨリ来
翌卯三月性高院へ移

實蓮社證譽上人

貞享四卯三月養林寺ヨリ来
同年九月性高院へ移

三蓮社檀譽上人

貞享四卯十月傳通院取化ヨリ来
之禄六酉性高院へ移

薰蓮社香譽上人

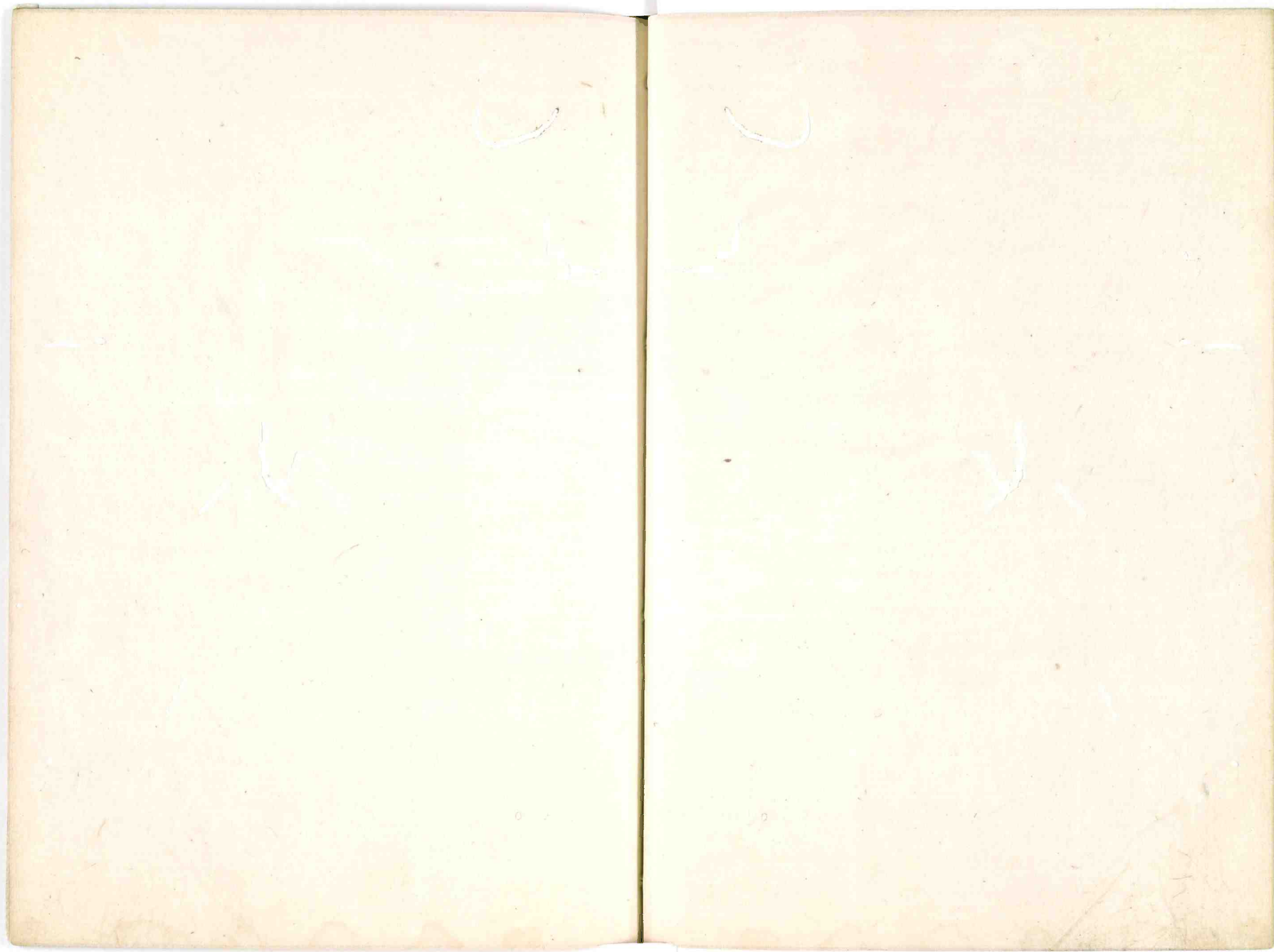
之禄六酉南寺町光明寺ヨリ来
同八亥性高院へ移

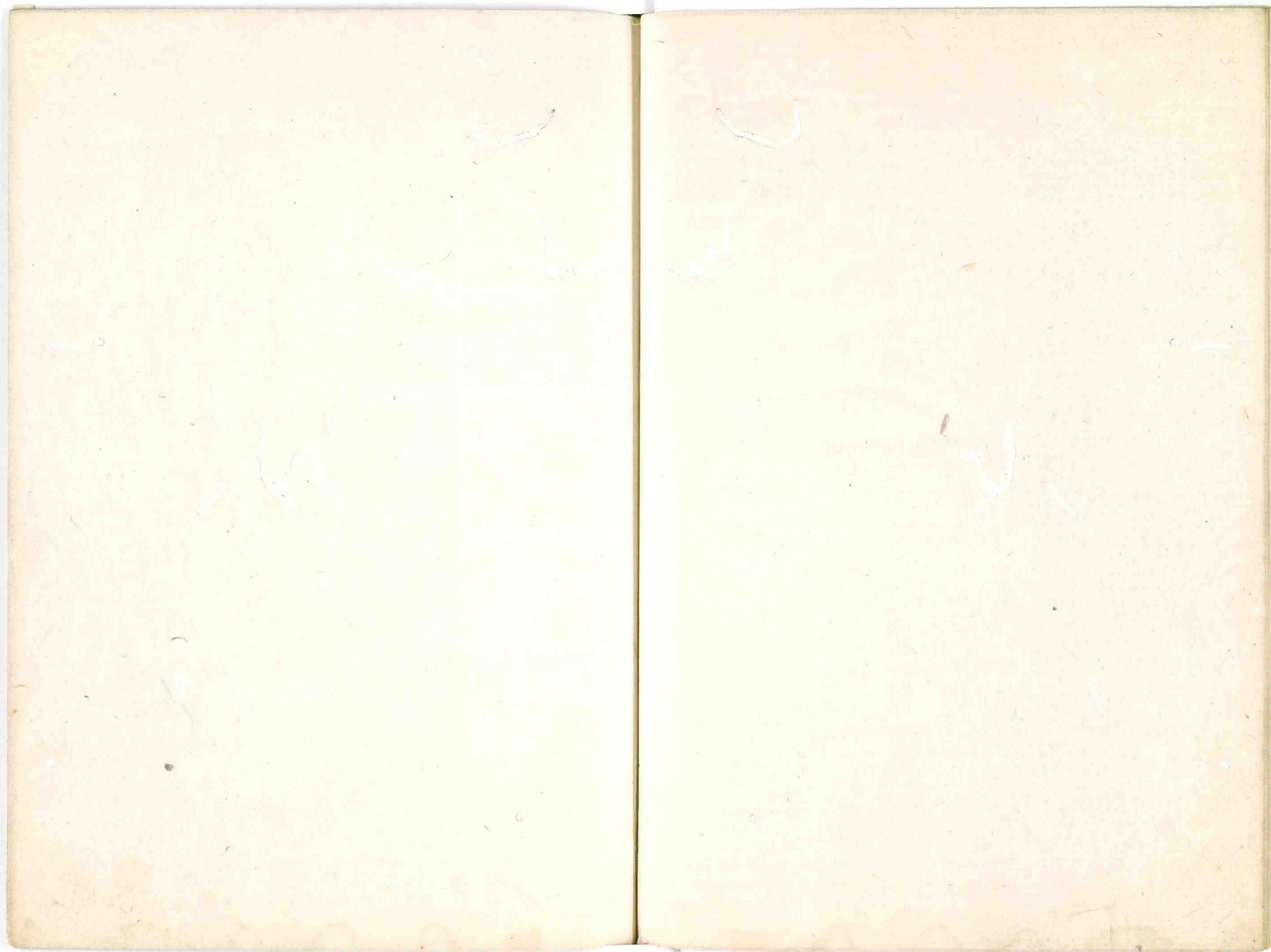
行蓮社賞譽上人

之禄八亥篠嶋西方寺ヨリ来
同十二卯九月性高院へ移

本蓮社顯譽察傳上人

之禄十二卯十月増上寺所化ヨリ来





定

一 奉命之或日每月二十万七千六百積役人
奉命八日十九日廿一日廿三日廿五日廿七日廿九日
之六可也延引事

一 奉命前在積役人已上刻之海出在
引月限の六才了多退勤事

一 評定前に廿四月奉一切無事

一 公事附波之原上以着了島山日捕拾等事
了らば事

附子事所給無^レ_レ之^レ老人^レ若^レ業^レ
病^レ人^レ之^レ俸^レ也^レ

- 一 軍中人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ一^レ也^レ
- 一 從人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ二^レ也^レ
- 一 支^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ三^レ也^レ
- 一 役人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ四^レ也^レ
- 一 定^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ五^レ也^レ
- 一 支^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ六^レ也^レ
- 一 役人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ七^レ也^レ
- 一 定^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ八^レ也^レ
- 一 支^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ九^レ也^レ
- 一 役人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ十^レ也^レ

- 一 軍中人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ一^レ也^レ
- 一 從人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ二^レ也^レ
- 一 支^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ三^レ也^レ
- 一 役人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ四^レ也^レ
- 一 定^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ五^レ也^レ
- 一 支^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ六^レ也^レ
- 一 役人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ七^レ也^レ
- 一 定^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ八^レ也^レ
- 一 支^レ取^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ九^レ也^レ
- 一 役人^レ之^レ俸^レ也^レ之^レ第^レ十^レ也^レ

判形事

右之條、可和守之者也

元禄十年 丑二月十日

○平海老 カニ ト云 莫ヲスルニ及 且云 某所ノ云ニ似テ云

○頃之 ヒラキ

○競 ケツ 龜 コウ 草 震来 ツク 競之 笑言 亞々 震

○豊 ヒラ 天 称杖仁傑曰 国老

○元 タ 源 タ 省 シラ 播 テ 次 シ 郎 子 源 タ 滿 テ 授 テ 薩 テ 兵 衛 省 子

連源太 子 源教 カ 與右馬允 省 子 競 テ 滝口 源 昇 子

丁七唱 子 教 カ 子 羊 井 本 ヲ 始 ト シ テ ト ヌ

○依 ハ 寺 ヲ 河 ヲ 耶 ト 日 ニ 布 寒 四 布 十 方 六 布
廿日 ニ 當 ル 休 ム 多 ク 不 降 生 天 子 守 子

○第 分 ノ 互 ト 燒 テ 兩 ヲ 考 ル 一

○為 的 院 ニ 心 止 目 留 心 ヲ 敵 ノ 氣 ニ 常 シ テ 止 敵 ヲ 以 テ 敵 ノ
目 ヲ 留

○古 多 大 臣 平 群 木 免 子 梅 日 本 紀 仁 賢 帝 十 一
年 八 月 帝 崩 ス 真 鳥 陰 圖 不 軌 十 一 月 所 誅 セ

○之 了 坤 ノ 方 ノ 凡 ニ ヌ

○石 の ぬ た 之 を 石 の ぬ た 之 を ぬ た 之 を

○か り ぬ 西 乃 の ぬ 子 乃 の ぬ た 之 を

○字 彙 破 鏡 會 文 鳩 鴉 會 母 破 テ 歌 ノ 名

○梅 ノ 天 升 梅 ヲ 也 わ 也 と 也

○蔭 ニ 子 某 某 ニ 住 ニ

○ 三花子 赤い色と三つをふたつはあまをねの夜ににふ
 しくそなたのまへるじいれおの 漆丸の言をきくお出さる
 際ハ飛とみうしよのまよおれおの 足蹴ハ刃の板お出さる
 希子わくまうくお見前をさしとあつと合せつこまを他は
 うくこくはとすのたをひくとましの 印指のわたり
 常衣といやを 舞とまうまじ 舞をね板御所をわ
 そつのおもておくもあまの 常衣といやをいひて
 うひてし中どしを合せつとをたるとまのまこあつ
 板出さるはんのもへるういして 花すれはつとあつ
 力あつらぬいそまひつとあつとをわあつとあつと
 又 舞とまうまの上をたのまへまお出さるつとあつと
 何れもいひてしういひてまのまこあつとあつと
 ままのまこあつとあつとあつとあつとあつとあつと

○ 白削

○ 梅符

梅の針をねおれつと

○ 惣河産

如多ナリ

○ 保下火

○ 水ヲおきら 板敷りニハサセ先蛤貝一味ヲ粉すしとあつと

○ キンハラとまのま

鳥小ニテ 鷓鴣ノ二容ニ似タリ 唐多ナリ

○ ベニ雀

泰之彦保ツル 命候 何れもあつとあつと

○ イシゴ

人詠ス

○ 唐多ナリ

唐多ナリ 唐多ナリ 唐多ナリ

頭ヲ尾ノ元ヨリ出ス 則 捕虫引出ス トスルニ 唐多ナリ
 唐多ナリ 唐多ナリ 唐多ナリ 唐多ナリ 唐多ナリ

及外有... 四足... 庭... 瓦...
庭... 瓦...
庭... 瓦...
庭... 瓦...

○市... 庭... 瓦...
庭... 瓦...

○建中寺... 西顔 南ヨリ一 即石堂也

二養壽院

造之

三光壽院

造之

行徳山

東院 南ヨリ一

一全外院

寺尾土成 造之

二清安院

石文土造之

三甲竜院

赤石土造之

四宗心院

赤石土造之

○... 法堂... 内也...
法堂... 内也...
法堂... 内也...

○唐六挽多... 宝... 年... 寝...

○... 庭... 瓦... 庭... 瓦...
庭... 瓦...
庭... 瓦...
庭... 瓦...

○熱中... 依之胸...
依之胸...

可幸篇

○子代包判殺 百半博也

物打もりり 大乙 厚身也

○包判の内言 亦伴能 印子

北ノ一在 筆ヲ 千二 丹方ヲ 千二 亦方ヲ 南 終 清 筆

○瑞穂子千金 氣ヲ 志 法

かゝる 志と 火 焼 而 夜 にも 又 と 内 何

格 以 瑞 穂 の 志 と 火 と 焼 而 夜 にも 又 と 内 何

火 今 外 而 内 何 志 と 火 と 焼 而 夜 にも 又 と 内 何

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

○包判の内言 亦伴能 印子

の中 一

○枚子 身と 捨 へ 善く 物 と 志 と 人 於 親 氏 と 志

○抱 陰 と 親 同 の 威 一 方 何

○元陽 宝 冠 良 言 詩

一 草 判 初 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

○唐 子 則 小 子 紫 衣 却 志

○元 口 口 口 口 口 口 口 口 口 口

○美 人 前 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

○許 證 人 宣 文 五 年 乙 巳

○江戸へ 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

○物 解 人 志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

志 志 志 志 志 志 志 志 志 志

天 正 十 八

○大分作の休息を... 代... 煙... 休息...
 一切 系... 月... 煙... の... 行...
 かり... 何... 一... 代...
 写... 春... 丹... 煙...
 揮... 同... 名... 行... 行...
 下... 呼... 同... 行... 行...
 下... 大... 作... 行... 行...
 行... 行... 行... 行...
 下... 行... 行... 行...
 下... 行... 行... 行...
 下... 行... 行... 行...

○お借金上 十二月十日

○甲九の... 園 非... 用... 所... 三... 行...

下... 元... 元... 元...
 元... 元... 元... 元...

○宿務 上... 下... 上... 下...

○新... 六... 十... 日... 行...

○... 二... 三... 四... 日... 行...

○... 六... 七... 八... 日... 行...

○... 十... 十... 十二... 日... 行...

○... 七... 十二... 日... 行...

○曆改正 欽明帝十四年 元嘉曆 仰鳳曆

大衍曆 五紀曆 宣明曆 貞享曆

○唐李遠カ詩ニ長日惟消一局棋

○白額死 ○祿恩髮怨

○大出彦彦ノ女屠ノ之才皆小澤心

○成^テ辰名 成^ニ守^レ也 曠^ニ深^ク入^ル

○醉^テ亡^ク酒^ニ 通鑑ニ下 唯古云亡酒避酒而逃云

○平家ノ士ニ福判者長綱 藤原公家ノ時中ノ
信人入吾小太刀好を十六節如しと銘五しと長綱
ちのひんこれしとありと年向きかたしけし
却るぬけり重二殺

○号^シ平^ノ良^ヲ平^ノ光^ト 五代孝服帝の時北久年ニ紀行四ニ
然れ移忍とあるといふもいふと例^シ失^ルス
平家如丸并列

○ノシバク トナナチ 秘^ト出^ス 五葉 云^ク傷

○道春 四書大全ヲ自写ス又五子とくしゆら五経ヲ

五部自写ニ字ス 来石夜とし 丁酉ノ大火の時
親書ヲステ神火ノ付リ石知倒^リリ川ニ退^シト

○女王祿 ヲウロクトヨム

○大元帥信 昨ノ字ヲ畧シテ石傍

○字同シテ心^ノあ^ハひ^ルと 言^ヒ意^ハ意^ハ別

○視岩翔 カウサクトヨム

○ 差文横

一 金合 瑞 <small>の</small> 百文 <small>の</small> 付 <small>生</small>	差文	<small>(以下並丁場)</small> 六十九文五分合
一 八百七十文	日	六十三文八四
一 八百九十	日	六十二文四八
一 八百九十	日	六十三文四九
一 八百九十	日	六十二文七六
一 八百九十	日	六十四文四
一 八百九十	日	六十二文三
一 八百九十文	日	六十五文三

一 八百七十	日	六十九文六八
一 八百九十	日	六十五文三二
一 八百九十	日	六十四文九六
一 八百九十	日	六十七文六
一 八百九十文	日	六十八文二四
一 八百九十	日	六十八文八八
一 八百九十	日	六十九文六二
一 八百九十	日	六十九文。一六
一 八百九十	日	六十九文。八
一 八百九十	日	六十九文。四九
一 八百九十	日	六十二文。三
一 八百九十	日	六十二文。七二

一 九百九十九

同 六十三文三六

一 七百九十九

同 六十四文

一 七百九十九

同 六十五文

一 七百九十九

同 六十六文

一 七百九十九

同 六十七文

一 七百九十九

同 六十八文

一 七百九十九

同 六十九文

一 七百九十九

同 七十文

一 七百九十九

同 七十一文

一 七百九十九

同 七十二文

一 七百九十九

同 七十三文

一 七百九十九

七百九十九の部

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

一 七百九十九

七百九十九の部

金子抄場

一 小判を五枚十文に付生	十二文六二五	一 一	十二文
一 一	十二文八七五	一 一	十二文
一 一	十二文一二	一 一	十二文二五
一 一	十二文三七	一 一	十二文
一 一	十二文六二	一 一	十二文七五

○奉り度候ハ附金ニ申取 五五仙度候可也
 至陸度候 申取 大申取

○たろくひの事なきを北条五代礼
の代礼にいつし高野
の代礼ありて文所
に處を昧ナリ

○古事云々
の知りち京に任ス
壁等ニテの如き

○世も遠別
の如き又世も如き

○丙午の世
の如き

大野多岐

○鶴生
の如き

○縁場
の如き

○千代子
の如き

○西風
の如き

○白死

○白雄子
の如き

○雌白
の如き

○蓮葉
の如き

○深山

○火坐

○田ノ中
の如き

○天守
の如き

○織子
の如き

○西小
の如き

○か
の如き

の鳳凰のり、四柱を以て田佐維の何の信と

○山物と世に事し人まき布 名をまき事 増し其意に

○多世危候とありまよ進ま様も 亦きゆけけのし 不乃

何より山に候んかゆし 名をまきの事、後りゆあまき

か知くあまき候ゆきの 名をまきの事、ゆあまき

ゆあまきの事、ゆあまきの事、ゆあまきの事、ゆあまきの事

ゆあまきの事、ゆあまきの事、ゆあまきの事、ゆあまきの事

○真仙阿弥 病言ナリ

○世に事し人まき布 名をまき事 増し其意に

○多世危候とありまよ進ま様も 亦きゆけけのし 不乃

何より山に候んかゆし 名をまきの事、後りゆあまき

一建中寺用山業蓮社成譽高廓吞

同二 心蓮社直絃誠譽吞曉上人

同三 寂蓮社臺譽不曲南音上人

同四 心蓮社念譽久近吞茂

同五 照蓮社鑑譽上人知白一志大和当

同六 本蓮社乘譽阿春上人石向

同七 頌蓮社白譽專了上人安阿

同八 實蓮社證譽廓天上人負阿

○ 灯心ヲ一把水ニ入テ剪シ衣袂・浴及ニ油等ノ汚タレヲ
洗フニ落ルニ妙也

○ 古田御戸川魚ヲ作リシニ感テ云 陶器・七掛ノ焼ト云々
○ 小籠中少松を以テ茶湯ニ精ニ本ヲ在ル人ト云々
を列ワルニト云々

○ 此方婦年如形是亦亦取 山形十歳 子仙方

○ やまゝん豆腐と神祝賀と云々 一々明らねと云々

○ 京都とゆの焼と和具と云々 一々明らねと云々

○ 摘綿・おやゆちと云々

○ 叙々西遊と云々 時百部相応寺と云々 十五方者云々 叙々
子月ある天年云々 又門和と云々 北信門と云々 叙々

錫のなりと凹たハ大豆ヲ入ラ水ヲ入ロテ塞キ置ハ大豆膨テ凹愈

備後三味線と云々 江戸と云々 叙々

と云々 叙々 叙々

江戸 大夫五人 五番七中 大夫格子九十九人 五番七中

教系 四百九十二人 番印金巻告 夜ヲ 一々明らねと云々

寺局口百七人 五番七中 叙々

寺局口百七人 五番七中 叙々

今ノ松壽院係の叙々 叙々

叙々 叙々

叙々 叙々

○西園と曰上北丸をてし西支之

致之ノ所遊去常しハシ

○ありて大云々水之りし

○西園ニ事云と云ふわしと 宋 松舟玉在等皆不克終

○法之ゆんで夏腥し蟹の殻

○又門徒 東西門に興正寺 以迄寺 寺田宗

錦掛寺

精舎 抄景

○胡ごぎ、孫ごる 吾居有る 孫居之の集し 法さ系と

上細た知

○芝橋の東の築も好ぬし 明徳殿為西の林 小大尾

○形如くそ山路くし 法華とと 一平のす後りた 原と忠信也

○貞享四年五月一日二日大橋及列國諸侯州郡位々

が負ヲ献ス

○敬云 篠居の常とゆ使しと

○さるやわづらひのさより重つるも白へせぬ沖の白皮

さより重つるも白へせぬ沖の白皮

○柞森 あり

○圓大住 〇静妻小二房 〇日奉直季カ子

○博弘所所所

○ハハ水多ラナハ火ニテカハ木也サレハ金性アワヤ土ナリ

○晋趙道子趙翔為屠岸賈被殺 柞臼程嬰抱朔子

趙武終滅屠岸賈

○叔梁紇有九女元子其妻生孟皮一字伯尼有足病 家語

○源氏孫、物死くゑ。○從五品前、上刺、大守、全順

七尾、上代、守、直、成、四、年、七

○源氏、貞忠

○志水氏、懐信

○田叔、忠、藏、宗、雄、后、士

○源氏、守、固

○源氏、通、十、リ、首、右

○源氏、通、十、リ、首、右
源氏、通、十、リ、首、右、故、公、大、主、上、三、ノ、玉、ハ、リ、汝、カ、合、ス、ル、外、ノ、空、御、
神、物、ナ、リ、死、テ、モ、汝、ト、モ、ナ、イ、タ、ト、ノ、玉、ヲ、
ツ、誰、モ、割、リ、シ、ニ、ハ、人、怒、リ、子、テ、曰、リ、君、死、ス、ニ、侍、行、路、ニ、テ、
一、昔、死、セ、ハ、汝、代、リ、テ、侍、リ、切、心、シ、テ、
○源氏、通、十、リ、首、右、故、公、大、主、上、三、ノ、玉、ハ、リ、汝、カ、合、ス、ル、外、ノ、空、御、

○元祿、三、年、源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、
○元祿、四、年、源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、
○元祿、五、年、源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○元祿、四、年、七月、八日、源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○元祿、五、年、源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○源氏、通、十、リ、首、右

○源氏、通、十、リ、首、右

○源氏、通、十、リ、首、右

○源氏、通、十、リ、首、右

○源氏、通、十、リ、首、右

○源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○源氏、通、十、リ、首、右、何、由、死、ス、ル、事、ハ、

○源氏、通、十、リ、首、右

後より此と黒焼可しに藤屋之所より一町あり

○高水大童日少知言二十五百十石 元禄十三年冬改

○成平の上流の隊長古合入の所ありり陸路ヨリヨリ
陸下ニ内角ニ立ニ有テリかとの所より米の由陸ニテ
附テ足クケテル所アリありてなる所ナリ

○長清、支那の年主少少の物名のかしら所ヨリ
内之ヤトト也所ヲ以テヨリヨリ一ト

○大山と云ふ所ノ所

粟巣村 継麻尾 内田 稻飼屋中切

○川釜七ヶ所ノ所

富田 小松 大浦 約協 福江 高ヶ地 山名

○吉岡 古岡村 古岡村 古岡村

大川釜と云ふ所を以て是れ其の所なり是れ代しニ云

○四湊 綿織 芦渡 古岡 麻生

○濃列 古江ニ江 上福光村 古福光村 中福光村

○古岡 古岡村

○古岡 古岡村

○古岡 古岡村 古岡村 古岡村 古岡村 古岡村

○古岡 古岡村

○古岡 古岡村

〇川きけ 奥の山を 川のほとり 多き水に

向きとそ

〇目鹿 佐々木トク

〇香農ハ撃竹ノ声ヲ聞 雲雲ハ桃花ヲ見テ共ニ悦ビ

云沙ハ嵐ヲユクルニ足ヲ踏裂キテ心ヲアキラムト云

〇此の山は 佐々木トク 佐々木トク 佐々木トク

佐々木トク 佐々木トク 佐々木トク

〇延宝六年 上京の所の処を来子柳と 山堂亭より

寂寂依トク 此の山は 常依留ニ侍分トク 古尼の

を鳩の和らぎ海をし 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

此の山は 此の山は 此の山は 此の山は

見

一上て即表

佐々木トク 佐々木トク 佐々木トク 佐々木トク

一在る位所表

佐々木トク 佐々木トク 佐々木トク 佐々木トク

ふりかへ

右移月位信信網を五部ト寄と存信位武到七全なりと
下五ニ寄りしん

一上仰表

信信位取部より下外ニ方下信信位名も
と運信位取部より下外ニ方下

一右位取表

右移月位信信網を五部ト寄と存信位武到七全なりと
下五ニ寄りしん

右移月位信信網を五部ト寄と存信位武到七全なりと
下五ニ寄りしん

一中取表

信信位取部より下外ニ方下信信位
名もと運信位取部より下外ニ方下

一右位取表

右移月位信信網を五部ト寄と存信位武到七全なりと
下五ニ寄りしん

右移月位信信網を五部ト寄と存信位武到七全なりと
下五ニ寄りしん

一下仰表

信信位取部より下外ニ方下信信位
名もと運信位取部より下外ニ方下

一右位取表

右移月位信信網を五部ト寄と存信位武到七全なりと
下五ニ寄りしん

右移月位信信網を五部ト寄と存信位武到七全なりと
下五ニ寄りしん

右移月位信信網を五部ト寄と存信位武到七全なりと
下五ニ寄りしん

此の条の下二の物をもつたがしん御を敬にス。

○惟子銷也材泥の針さるこま とうらんや一つこせん
まじら海へぬえまけをいほさるし能原ツルこ

血 喜まきの系百奴うの行き水に 一垂と長
汁と志ありぬ 碇疎血 能細糸一とちし付
合也引合のま書りのりのま けとりとちけし
表へぬこ川

◎とねんた田みくすの表物後とち極血不節のこま 五原門合
概に付んを那多る凡武到ち下程下也おえん
あひか免言下とをく産一凡ち極の極極之刑
水原古くお産程と下也とをく産極極之刑
一物後之表刑中けりて第九月極極之刑
新表物もけりては山とを産極極之刑
お細の春極極之刑 極極之刑 表はるる極極之刑

一 派高之志刻と下 而表と極極之刑 廻取海之
極極之刑 凡ち 即云極極之刑 之形極極之刑
極極之刑 極極之刑 極極之刑 金積九即表
常とケルと下

此条八月ト凡書身ハモテ九月ノ書身ニモテ九月ノ六朱鉤頭ノ前一ケ条
一 所表之 作付しりしを 形し 金之 常と下
金之 常と下 廻取海之 極極之刑 九
即云極極之刑 之形と極極之刑
一 物後之即表物極極之刑 極極之刑 極極之刑
勿極極之刑 極極之刑 極極之刑 即表刑中極極之刑
概之行書之 仕物極極之刑

五原門合
おえん

平八月

本居屋 大正五

大正七年九月十日 出立 三原村 之 見

○ 右板と後板並板訂合 式割大板併板在也
重年古板併板川合 七宗 以書付し 西板
右板中分こメ
式割大下 五層 也

お下ハ

式割ハ

希金し相定 松平九月十日と
お下ハ

お下ハ 五層 也

他百五三付を 五式命三高也

又。通割ニ一通アリ 又大方同之 是九八六朱ニテ点ス 末ニ

延宝六年 辛酉 九月十日 三原村 併板 山崎 五層 併板

本居屋

お下ハ

大正七年九月十日 出立 三原村 之 見
お下ハ 五層 也
式割ハ
希金し相定 松平九月十日と
お下ハ
他百五三付を 五式命三高也

○ 小田井村 併板 五層 併板

○ 新井村 併板 五層 併板

○ 新井村 併板 五層 併板

○ 新井村 併板 五層 併板

○平治の乱京師に移来半井が並之を二り分ち常安寺を造り
白く申すは唐六師と云ふと三年飼て百人虎ヲ殺とそ

以常安寺同ヲ押へて此為半ノ父メニ切らん

○常磐ハ七三ニテ清空ニ刺廊ノ由テトヤ女子ヲ一人設テ
多シガスサメエテ後ハ一條大蛇ハ其處の北の首ニナリテ
子ハ殺女出馬と云ふ

○瑞雲が中井中ノ大為ヲ作として三宅沼上浦は八丈島
見付常奥の島新島ニ舍給ふとそ八ノ島と云ふ
中井が奥島作沖小島ニ不載ニ舍給フ而之九七島

○梶目

○保之助流京師が皆之ヲサナキ者若ノ履タニ只ヲアテ
ヨリへ出スと云ナラハせん誘ハ實也せんゾヤ

○節考 二位奏 叙位 降月 四ヶ之大事ト云

○所藪 ミカキト云

○大夫 道 ミラナキニタテ
ミナキニタテ 五位ノ右ヲ申ス

○刀浜 ト子 六位ヲ云

○踏歌 アレニミリ 朝所 アイニトコロ

○定考 ヤウジャウトサアサニニヨム

○新集 二月上丙 五武天皇 大宝元年辛丑八月始

○歳を院標所地界の地所云

天下をかくのけしれたるはけり末の行とて天下を
餘林よのめしぐに尾流まづよま書の跡をて
命をけしよのやそいづらや尾流大板

。丁酉江戸大火之序序書

あつひめと人の命と商の年あつひめとあつひめといふ浮世の

は身命といふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめのあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

あつひめといふあつひめといふあつひめといふあつひめ

一層橋乃近取入町とてしうりお船作
 渡も島野自願三小濱民アゆゆその外町を行
 乃同心屋敷八町なり乃津舟屋舟舟舟
 れやう殺ヶ所海道もたね年越をきつてし
 大さるはくくてもうべらま了殿舎とも見よき
 八煙まつまそ焼わると極大のえんあ
 事守重切利乃雲れえまそものむらんと
 おびゆらあまおひて殺百れ胃せらりか
 のまんと風下まうてげわりのむら
 行はるり具意るあけこもる夏前れわく
 もるぶいしあま行能とこありとて徳人

家よりわりのわくもまの南寺乃本堂もあ
 るもろまもろ殺ヶ所乃院くも磁清も一回
 焼びるもろろりろりろりろり車輪行も
 かの月とじりりろりろりろり雨乃ろ
 おとく大勢むろろろろろろろろろろ
 了ら乃髪ふもろろろろろろろろろろ
 焼出まもろろろろろろろろろろろろ
 めもろろろろろろろろろろろろろろろ
 海遠いもろろろろろろろろろろろろ

けしむはわらひも人ふらふはあつたまにのりしを車
 の志もよきな成りしなりお死すも生もなかりておの
 りさげよの又そらなむと今かかると大急れ中
 も遺人ひまかり引すをほる車も持ておきて
 言へばげしとあふかりりるはぬのや乃
 果があ一跡を乞なりとそはかりたつた大位牌
 小かきい漆ぬり節録いろくぬる成車長持り
 うら入引叫わたりとる近くもえん事と大坂のつ
 まんそらちかすに成りし乃まふるをとりて
 浅野野邊を移して種ちさるるを成用あま
 月りのあつた位牌も成りし大車と事
 物成ると種いれる遺人どもわらひたぬ
 依と来と持いておけるを成りしはつた
 乃入るる右とていふ神を心えてうをひおそ
 ぶが成りし中へけいりるを成りし病成結て
 今とていふとみえりしとあつた大位牌
 うらあつておと持り行入るるかけ中よ
 おりしとあつたよはなとあつた遺人
 しもあつた成りしは成りしとあつた家財
 つ物皆焼けてあつた人あつたはつた家子とだ

けしむはわらひも人ふらふはあつたまにのりしを車
 の志もよきな成りしなりお死すも生もなかりておの
 りさげよの又そらなむと今かかると大急れ中
 も遺人ひまかり引すをほる車も持ておきて
 言へばげしとあふかりりるはぬのや乃
 果があ一跡を乞なりとそはかりたつた大位牌
 小かきい漆ぬり節録いろくぬる成車長持り
 うら入引叫わたりとる近くもえん事と大坂のつ
 まんそらちかすに成りし乃まふるをとりて
 浅野野邊を移して種ちさるるを成用あま
 月りのあつた位牌も成りし大車と事
 物成ると種いれる遺人どもわらひたぬ
 依と来と持いておけるを成りしはつた
 乃入るる右とていふ神を心えてうをひおそ
 ぶが成りし中へけいりるを成りし病成結て
 今とていふとみえりしとあつた大位牌
 うらあつておと持り行入るるかけ中よ
 おりしとあつたよはなとあつた遺人
 しもあつた成りしは成りしとあつた家財
 つ物皆焼けてあつた人あつたはつた家子とだ

41
知りし他人のよ成我子と地のいよをい
うらふとふれとさくまげふる若もあ年若く
親いとけあき子わいふま女房成りいふ
よ成りせあふよさしてうくく知らぬ者
そわり家上籠屋の首領は石帯刀と
すあきつとく雄丸雄成り丁ど上籠屋
近付一六節刀剛科人とそいす籠屋いえぢ
の命あやうまらふまらういふれい海とよ
ふびんののあり家あてエタケえ事とせえん
あはれ志づくく捨ちしあふが了足るなせ
ソグスと地のはすいづん命成りするもあを
ほかりたふバ人もあす下谷のまえんが
あまの屋けいも成成たすずあうたらは我
あまの屋けいもあうらう命成りあすうら
若又け物成あててまのうさる者はあは系
まをともがーしそあめ事けはト又及ぶす一
門がでも成成す一とあうするのち籠乃戸
あひあ教百乃科人といひあひあかす
りり科人といひあわつせ済とあがか
ああみとあうらうとあひあひとあ

花々山人橋本細川節刀少将武部一色富子
有徳馬賀出羽守日守江山名禪宗一色富子
か浦部合ニ平みテ取支方少はあちア人ド
り人ぞんし細細とてちきくぬんじんぐぬんよ
いそぎを面二千チち一同く燃たの右徳子河
乃大といしゆ那をそ焼わがりかのわは空
みみちくてむえ海せるとじちちつてそちり
わのまり村わしゆわふ人乃うんよんむらり
ふきいけー六教百れ男世さつぎいんいゆりり
はく祥てわんいん人のそ成ふ身ても一隊に
わるといひい屋乃ら屋よわがりてよくおにわり
いまいといふ節くそわをんまいたる十ちちわ
りらよとあまたそあつりそ乃ら屋より路の
中へとじ入るりせめて余れたす原とてう
らせよとあつりいそいそをたちけりそを
り屋成らちくそいそいそをたちけりそを
せよとあつりいそいそをたちけりそを
らそんぞとあちわぶると成とさるあちら
らよとじ子ありおちるありふしとあふそ
行いあつるま一とよふそわをいそり

死んぞてうろ尻りそのす二百三子餘人
之所ひかりに方りそありて隔はさるがう平地
なるのちくるとそののつひ亦乃死いひ骸こふま
て飛とひたすその力すうとせしませすして河
ひくうらわたり身するものとおなりなり
やうくすさるる重くはへる見はけれ樽
と猛ふ大りくるをち死いひてそのうごんたは
死人れうの夜よろくそて人よせれ車よえ
らまていまはかゆたたくまてるとれよめい
あまんとすまはたた大たくまらり後

45
己は火の燦はぬれとくよりりる転人てと
こまて念ん併ぢり申まうとくわとまてこりりす
わつだる前後れ極たちよとりまて一回り
わつとさけよ好とい飛い相あのいひまてひでま
下さ金きん輪りん乃の座ざららとすすとめ毛もとま
むるもあり翌日あままばるら谷や町ち横よ山や所しれ東
西南さんざんざんざりり臥ふける死人しのわらら海う目め
わてらまぬわりの海ありまてその夜れま乃
魂たまををららととららりりててもも風かぜるる地ちもも志しががままで
海うをを渡わたりりててにに座ざををと十九じゅう九く前まへににあり

のて守^と妻^ととせりけ時^と又^とわれ^とあて^と沙^と念^とのう
 ち^とあ^とる^とま^とげ^とる^とま^とた^とる^との^と七^と百^と三^と孫^と館^と人^とあ^とけ
 ば^と所^と念^との^と大^とく^とり^とて^と時^とめ^とと^とま^とり^と来^と儀^とり
 の^と時^とき^とあ^とり^とな^とま^とバ^と徳^と人^とこ^とれ^とら^とあ^とり^とま^とせ^とじ
 う^とあ^とあ^と儀^とき^とし^とう^と海^とく^とじ^とい^とる^とひ^とハ^と川^と中^とま^とあ^とら
 じ^と入^とて^と死^とす^とそ^とま^とあ^とと^とあ^とハ^と七^と八^と町^とと^と屋^とに^と
 大^と河^とが^と起^とま^とく^とう^と海^と新^と田^とま^とい^とう^とり^とま^とま^と乃
 其^と家^とま^とで^とも^とく^とも^と焼^とり^とり^とび^とて^とま^と夜^とれ^とと^と
 此^と地^とま^とあ^とり^とハ^と山^と中^とま^とを^とま^とて^と志^とげ^とま^とり^とぬ^とあ^とす
 下^と又^とわ^とり^とま^とだ^とに^とく^と八^と方^とハ^と松^との^と影^とた^とま^とる^と家^と者
 ども^と親^との^と残^とり^との^と又^とハ^と書^と残^とり^とあ^とあ^とて^と名^と残^と
 る^とじ^とし^とく^と知^とり^とま^とま^とり^とて^とう^とら^とり^とる^とひ^との^と邊^とて
 多^とし^とよ^と後^とま^とづ^と人^とあ^とり^と又^とハ^と死^とら^とせ^とて^と徳^と人^と
 わ^とら^との^とま^とく^とら^との^と残^とり^との^とて^と難^とを^とわ^とら^とて^とあ^と
 月^とけ^とと^とま^とす^とあ^とり^とら^との^とわ^とり^とり^とて^と焼^と死^とて
 子^とあ^とり^とあ^とり^とた^とる^と死^と骸^とども^と残^とり^とま^とけ^とく^と親^と
 子^と兄^と弟^とま^と弟^との^とま^との^と残^とり^との^とま^とあ^とり^とは
 一^とら^とれ^とる^と人^とあ^とり^とは^とく^とて^とお^とは^とる^とて^と大^と方^と尼
 法^と師^との^とま^とく^とら^とあ^とす^とが^とり^とま^と焼^とこ^とま^とわ^とら^とは
 山^と狩^とま^とあ^とり^とみ^とる^とえ^とら^とせ^とて^とあ^と種^と焼^とあ^とく^とて^と

豊後^トに肉^ニつけて魚^ノわづり^シものおくるる
 とわりみ^シまわぬ^ルれ^ハすれ^テそれ^ヲ
 ち^ハこ^ト見^ラズ^テい^ハら^ハ祿^ハど^クお^シに^ラる^ト
 け^レり^ト海^ニま^シた^ハ盗^人ども^ハあ^らず^レて
 死^人に^ハ勝^チた^ケ膚^ノは^ハけ^レた^金銀^ニも^ハ
 たり^シこれ^ハ焼^金ご^りち^ハ出^テら^る代^リに^ハあ^らず^レ
 せ^レい^ハと^ハ人^トを^ハわ^らず^レり^ハ海^程に^ハ市^レこ^ト
 それ^ハ町^ノ中^ニ過^リた^ハ小^後に^ハた^りす^レた^ハ家^跡
 難^員とも^ハ殺^シた^ハず^レむ^ろい^ハり^ハち^ハて
 ら^ると^ハ海^程に^ハい^はる^ハ徳^行する^ハもの^トお^もう^る
 け^レり^ハく^ハい^はる^ハ又^ハり^ハる^ハを^ハい^はれ^母
 け^レり^ハあ^らず^レ命^ヲを^ハさ^して^ハ死^シて^ハむ^ろ
 ら^るね^られ^ばお^もい^はす^レむ^ろの^ハわけ^ハで^る死^人
 け^レり^ハり^ハい^はる^ハわ^らり^ハる^ハこ^トあ^らず^レ
 と^ハあ^らず^レ母^ノも^ハ何^レも^ハ人^ノ焼^死て^ハら^るけ^レり^ハ
 こ^トい^はる^ハそれ^ハい^はる^ハ家^ノと^ハり^ハて^ハり^ハ葬^儀
 佛^事を^ハん^てん^て極^ノの^ハせ^てあ^らす^レり^ハる^ハ孫^ノ
 子^ノ兄^弟を^ハく^らい^はす^レて^ハい^はる^ハら^る
 い^はと^ハあ^らず^レ門^ノを^ハて^まし^て母^ノを^ハり^ハす^レて
 已^んた^ハけ^レり^ハこ^トい^はる^ハい^はる^ハや^らう^と

ふつりてきつりきつりやけ日中もあふ念仏
ゆれいあぞやまうせんことし海をて西みやる
おくられと念と生と強生せんといふおし
あつて強まふと此志やじらうせんそのこ
ちてまうたていふなりて耳りまふやわす
御もまうとくしるりあは徳はせんあふとふ
らしてまうすていふて六道ははらへま
まふしあふあといひ筆は母たふまおとら
まふしはまふまふのびて命あするもはら
あまがすてふりいふはまらあはてをまは
い

45
あつて強まふと此志やじらうせんそのこ
ちてまうたていふなりて耳りまふやわす
御もまうとくしるりあは徳はせんあふとふ
らしてまうすていふて六道ははらへま
まふしあふあといひ筆は母たふまおとら
まふしはまふまふのびて命あするもはら
あまがすてふりいふはまらあはてをまは
い
あつて強まふと此志やじらうせんそのこ
ちてまうたていふなりて耳りまふやわす
御もまうとくしるりあは徳はせんあふとふ
らしてまうすていふて六道ははらへま
まふしあふあといひ筆は母たふまおとら
まふしはまふまふのびて命あするもはら
あまがすてふりいふはまらあはてをまは
い

のりまき、新越とどまびてふは、ふ事つ
ざりたり

武蔵後守之上段

しつゝわがし下

わがし十九に江戸中より江戸にびびりける者
鶴と成すものおまじつるといとさうい
るしつゝ焼ゆり一も賤その一族といれ
るわがしごいごいれし一みけのりいそみ
すたごいごいれし一も集りともやと
おまじつるわがしごいごいれし一も集りともやと
酒肴成すつるし一も集りともやと
むらり又少岩川に伊豆院ありて川の下新宮
近所本岩川に伊豆院ありて川の下新宮

アハ煙此わりの海成をきく下るをみらぬのは
志づいづるハ逆風よまきわく成を煙よりと
省と又よまれよ乃煙野れく妙中を煙
ろりよと云ふのしわをせおれとハ志をんは
めず志とよ小を青とせと打もけく言
志づバ付別とらうとす台祥寺れ学宮院と坊
りえうはり車轆程多矣とらうとせりれ中
ぬちりて十町二十町がわよりえきと事
同所とす鉢ケ不たり志づいづる水戸申納言
敷さうとせしとるるあひーたうらうと河や

ういふたうと婦と煙とよまきたてりえのわをも
ち海と海とて中宮所可れ森れ一と飯田
町興壽院乃此下た典院と乃高所殿中乃
九程河殿守二の丸と九と初とて杉早加
聖守ありく伊豆守と殿と守と舟と行守
中田内記酒井の守藤堂大と小並原大と
ち史安友村とるると屋民と福井と酒井
雅繁と初平和泉とありくおれおれとく
越前守ありつれ法也と金銀珠玉成りつと
みづとまきとる大屋と様と徳との大名十と本

そが事可世行此所為下中川才九頃余
尾乃云新なる河細立小庄とわく五ヶ所と云ハ
河のうらちをそて才前そ手よりらあつてあて
熊谷橋の内じ村との大カスに細川越中が早
彩太良日相模守河橋中酒井備後守山内土佐守
あま才替第拾丹後守戸田九門津波屋河内守
森内代官権守猪馬小笠原自勝三右良義親守
保科陣正松平丹波守海江初也守新庄越前守
石平但守織田貞勝守松平重直守日守
小松信勝守織田丹後守松平常刀重平能登守
は丹後人々世に下河部に下守ありと云
毛利市に水野下總守山内自殿末代守
市田右近守中根重義近右衛門見守
日蓮守河内根替織介仲尾守河内徳義守
賢仰乃くよむと云久々の御形廿六前小八
の御形十七ヶ所伊豆守河内守奥平大膳守
河内守大久保加賀守伊丹守歌守早歳守
山内大膳九鬼大和守坂田守河内守新庄橋の内
九ヶ所南河内守廿七ヶ所年月日比仰り
ある御形 昔をよみみづきと云く大度

解知つゝもぐらふをせむわいなりまの薪月の
はより今日といふ事をも既に八十日たり雨
一滴もあらず乾切たる家のうゝ大乃故あ
るもいげしき風吹あてりまそ車輪れどく
る極大地ふかとていふ町中より出た急
攻の事そらちすも車も持たず小踏ふつ
わげせきわい人交ふ公けりまそ成りえす
諸人ともいひあわいひめくるる極大、
まぐへ毛え流り一六四れ前々集積しる
中程といふ事をもアガれ橋一筋といふ
炭屋の家のわいて大井中よりまれあ
れ人一とみみれま切つらりいげあ
はらまらるる事そらちて押あさげおす
まらくせゆりてりえりりかまわり
あつれれ人成たじし橋よりりて大
んとしてゆくまらまらまらまら
海より若とわわあらしきみゆり
た城まらまらまらわいりりりり
いせび大らまらまらまらまら
あらのまらまら倒れまら一四ら
あ城まらまら

ぶらうの濃霧より煙るす海多岐ありて
とてまるけりて人どののせりけり
神所の煙るあまの獄車に呵責の請喚叫大
喚叫の聲にわがて悲叫んは斯と覺て哀之
爰して焼死する者凡二萬六千餘人南小之
町東西二町すま重り川道ある死體之
ゆにありけり家財雜具大に金銀
米穀いらすもすす過山路に打捨
付積り急を以て朽ありそまらみ
あり新橋木挽町東に木町あり
燒より武所館り川に紀列又納言
尾張大納言れぬ所是處あり奥平義興
といふ事大に蔵屋あり十六ヶ所もく
りりといはれる果木は捨抛けりて
此間れ刻より海迄ありて燒と海に流る
深川ありて六里ありりれ湊
とてよりの燒る事なく舟般と也
くそやうく燒る事なく申乃
刻よりり江成乃西橋所あり此家
り別よたのえりて壬午年四月
守

あまのついでに海三門の川にうへりまじりてはけりかくお
 海三門のさまごとく不化寮百十ヶ寺ありて東門
 神のれ中社神樂堂護摩堂ありてはす
 あまの先念よりしるすも夜に平に列しり
 しみかもしくさるるも此侍ありて風おる
 るみゆくはるるばらちけりありてはあやするも
 徳人にいおどろきわつてすまらぬとあはれて命
 ち事とすくあまのいばりてはせらふも
 ども大はあひりれまははれりかどは場とすよ
 るみるく十一町芝の二町の海ありてありて

大のあのをつらう清くありて中はありてあまの
 道すくく六十余町ありて十町ありてありて
 野系とありてあまのありてありてありて
 て西中ありて百餘町大名小路五百餘町大名は屋
 形五百餘町小名は密和二百余町不そはあり
 川のののありてありてありてありてありてありて
 守大は此所ありてありてありてありてありてありて
 見付神田ありてありてありてありてありてありて
 二千餘ヶ又四百餘ヶありてありてありてありてありて
 わかるといひてありてありてありてありてありてありて

一層橋下の則ち橋中流有淨土といふあり
後ばり江戸中此名残りといふに焼のころ出
庭のす九子余庫を此中焚けりありあり
十かつてとこ多あり代に此寺實家これ記
保と此時とわめて其めん次々堂社あり
神田明神山王権現三神乃社神の乃平宮
折言なり知足院日輪寺西東あり折言あり
典なる院台祥る金剛院弥勒院大龍寺泉光寺
兼師も珠見も彩也も唯徳寺地藏院是岩寺
乾也も船泉も也之も信經も常連寺増も也
此亦化療用台寺海安も常徳寺長徳寺
直道院もかろも院三百あり余宇みかこ
とく焼ありあり昨日十八日焼あり焼に
より十九日焼ありわかれあり此屋に別を宣和
や日大ち事みれじいこも旋風ありそ極大
ころみあり十町亦町も焼あり焼に
りえわがりくくかかも前後もあり焼に
あり法人もあけまとして焼にこも焼に
た又ハ大石小石れ家も昨日ありとあり
さして之焼にこも焼にこも焼に

ぐわいぶ大劍鏡してさうく竹本まげまは假屋
 せしもす大了、いふ雪霜ふしうそ母さ
 ちそやふふい、劍凍て老少男女おろく
 死りり一業不感乃因果人ども死すく幾
 とすれせふまりり人忠成の事てはあまかひ
 剣て死凍て死すいつも命はあすす無
 悲をいふとあつたり志るあま御城北西乃
 山乃もすちうろふあま、大谷小名より
 てあつてふわらひ日中橋わらひ、京橋方
 りたいて假屋がしそ奉行ごそく、いそ漸ご

卷しうえいさりのあり、せむか又御城中
 ろまの口右幸刀本浦肥米岩本候とま
 せ、取ご所奉行して所成橋新橋日中
 橋、あしむ増ちあま、假屋ごたそ漸ご
 巻、あまを、劍人霧民み、絶行し、ゆあま、御
 中、れを、居男女わのまりてあつた、死て、あま
 清て、あま、う、道りの、い、那、れ、建、ハ、焼、け、ま、り
 家、業、候、の、み、け、飛、乃、し、あ、ま、ら、ん、け、て、命、す、そ
 せ、あ、ま、及、び、候、あ、ま、り、あ、ま、あ、ま、く、あ、ま、ら、ん、さ
 二、あ、ま、あ、ま、あ、ま、ら、ん、あ、ま、あ、ま、ら、ん、あ、ま、ら、ん、

夏のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...

63
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...
奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが... 奥のしん頭れが...

将監あ人あり江中四百所城外は多所
百餘所の町人ご町もせし相渡するをよ
ししれ九十町ふ去木乃功ありて町并一
柳六分間株ごありて斬ごそろて守麗
ふいそ侍りもとれち地はしら六らるるは
津来せりて今ハ唐子十間ありきまじ
らうて車馬路不正人のいそひやすら
り又きありの町もと柳原をも町屋一通り
のやまきりや敷又四尺ぬ石成ありて東西
十町ありふ去もごつるせらる日中橋北南

64
町
ふ町もると四町市まをれ町屋ごりのけご
四町又川もごにそふて袋け東西二所す
ぬぬごり弘亦日中橋もる京橋も八所の
百二町屋三ヶ所ごりのけ今兼三十間
づみむらくるまあり是ハ町屋はりぬせむわ
い諸人ごらうご入あしやてはすまは是成
かト人物ごそごあるは唐も及ふぬ去も
御りごもは江中の者いぬるも退
是なるもたぬあごの所る招たぬのけ
五ヶ所の町人ごみハ引料ごて家をも家付

金子七條の宛紙の宛先をくわしてしるすなり
又その年の暮の焼紙のやうにして大なる
紙にすき金に、賜ふより一八の候より下
民の御免の事この御免の思はれぬのみは
をせしむる中流り移るてしるすなり
禮は厚くしるすに庶民の財産に利を飽て
めであへさうするの目も百億なり柴火の
しるすにいろし物物賣しるすはさるる
ある大の人の成りありしるすに
ありしるすの事なり

15
十八日此の事めは親類の中を
のりたるありしるすに酒者人の
み祝言して祝儀のしるす酒を酔ふ
ある事なり又ある事なり我
ふしるすに車を持ち入る
てしるすに芝をみしるすにあり
信に信ちしるすに持ちしるすに
信に信ちしるすに持ちしるすに
その事なり一膳の御免の事なり
ある事なり一膳の御免の事なり

いり獄卒くわくそも奇責きせせんとそやみ候まほころも
破やぶらりけつらありて一ひとづか子こせきて見みるも
しゆきとせざらりともあまバあま人ひとともハあま肝かんに
くしてあがりハり押お立たてりて見みまわたりハ
くやみありしる此これいりハむりくしめて今
あまこけふたれすえん残のこり流ながれりや
わそこらさめて無む向む地ち獄ごくなるハあま人ひととも
福ふく多ためこころさびくそつめくせむねなるや
しわたりりいつありて極ごく楽らくれ乃すなはち心こころを
とめて流ながれまてころもあらくもあまそつめなる

66
さくらあつてハ高たか生せい道だうれわたりるハあま地ち獄ごくして
行ゆき候まほわたりてあまハあま老らうあるものを
人ひとハあま肩かたよりあつてまそあつてハあま老らうハあま心こころ
今いまじやくありハあま人ひとハあま安あん楽らくをあま見みたりこ
くまらりてつてまそあつてわたりてハあま心こころを
まらりてハあま行ゆき候まほわたりてハあま心こころを
堂どうにあま神かみハあま人ひとハあま燈とうのあま子こみりてハあま同どう魔ま大だい王おう
信しん生せい神かみありハあま心こころをあま見みたりハあま同どう魔ま大だい王おう
人ひとまらりてハあま心こころをあま見みたりハあま同どう魔ま大だい王おう
ありハあま心こころをあま見みたりハあま同どう魔ま大だい王おう

一門書お家と書とみるありび。ふきしりふ
れはしとや。すくみ髪いそり衣さすみ津
まきまを海へこのうりなり。奇生あつ六道
のくもありとおぼ侍り命あつ世成と家
おふふらふれは侍あつらり。なみあつを
いふまゝな行つ今す。これ奈成あのみ
侍り侍檀徒起と仏れときあつらり
わあつ一徳あつた地ま。物うきあつる業
提の縁とあつらり。長祿と侍らす如
とふに海のうり。まゝにまゝに

一丈のうそあつたまはあまおしりぬ事
あつるうらたて。るれに海へい
と。あつたされな私とねらふるうす
あつとるうな人れ大勢一因死した
あつと。はあつた家子といふ衆あつて
いふと。これ成つて。まゝにまゝに
宗れ仁宗皇帝は。法寧景祐四年十二月
候に。一。大地震あつて。民れ家くさ
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。
二子三百人。底。あつた。あつた。あつた。

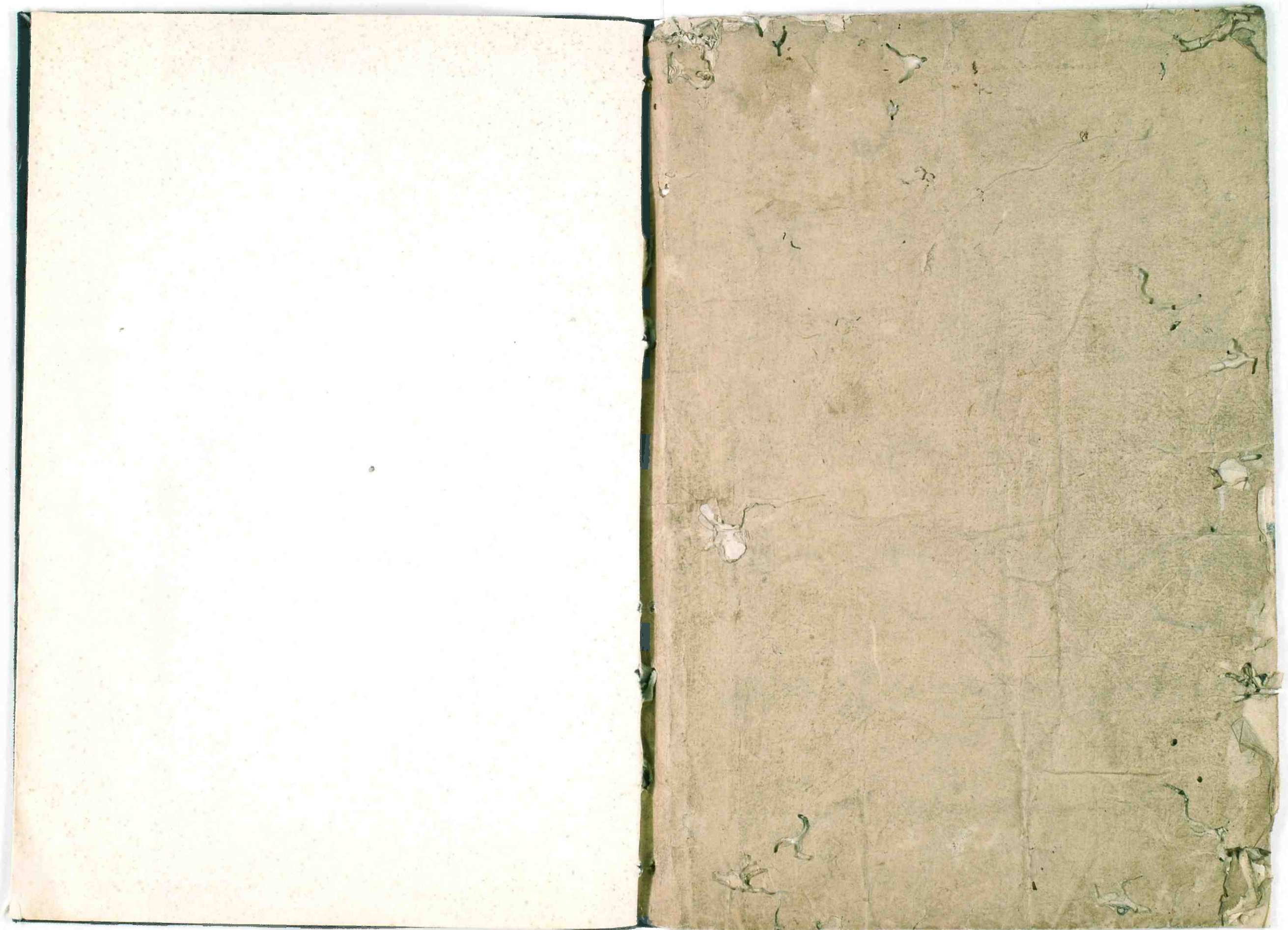
わるし一里れ行端あり家りの國中五十二
 六百人と志せりそのち又大元比世宗皇帝
 乃河平祥興七の八月又大比地ちあり
 うごして山所事その谷さうも大本あつて
 大川さき地はけとつ事そ下も浪波
 行わがゆゆありあまのわりて
 國中五人乃死する事七子餘人と志せり
 ね多く宗乃成宗皇帝乃河世大徳十年
 乃大比地震あり也子餘人死せり
 武宗皇帝乃河世大徳三年六月洪水

水はあふり事りて友会民家ごとく流す
 事二万一千八百七十九物あり
 死するもの数いさすし志せりそれ
 洪水共ありて人死ありけり
 乃人死あり及て又日中あり人王
 十代崇神天皇乃河平即位あり
 て人乃死する事天下もす
 疫癘流行し
 平家世ありて河内あり

邪れ大元早急減しくみて調伏するもすて
法永十年十二月廿八日申三位乃中将重衡
三百餘騎めて南郭めとてを築表坂北也
家より大元ひてせめしむ七丈大元大元け
よりめしむてふせざるにて落し乾れ風を
げくきて了種すふ大佛殿小殿付ありけ
大佛殿乃とふと梯が加まつて兜も八尺法師
つらさるふ事と多くわたりてくまかたる書
燈火すも堂もとくつとてふ家かことしと
行りてる程も梯をふし行りて下ある者ら
行りてる事とくちなる者いふ言ふ天井も度る
ありたり天井れ行くもあふぬとのいふ行り
もて何とふもてつかり降り侍人惟れ小屋
ありて下も下も下も下も下も下も下も下も
引れろすも下も下も下も下も下も下も下も
十丈も下も下も下も下も下も下も下も下も
下も下も下も下も下も下も下も下も下も
とのハ邊塵も下も下も下も下も下も下も下も
くも下も下も下も下も下も下も下も下も
かう御く燈も下も下も下も下も下も下も下も

らう
ふ
い
い
り

十音元禄二年己巳雜貨次日雲元忽之下書



愛 知 県



1103280486